

日本災害看護学会 先遣隊活動報告

4月23日（日）の活動

活動者：渡邊智恵、寺田英子

当日の状況（2016年4月23日）

第1回目の地震発生から9日目。本日より九州新幹線の運転が再開され、博多－熊本間がつながり、これまで以上に復旧・復興が迅速化されることが期待されている。また、被災地では市営住宅の応募が始まり、区役所には避難所生活から早く脱したいという多くの被災者の方々が長蛇の列を作っておられた。しかしながら、余震は続き、さらに被災地を雨が襲い、土砂災害の危険性がある中、なかなか瓦礫の処理が進まず、傾いた建物等を日常的にみる状況が続いており、日常生活を取り戻すにはかなりの時間を要する状況が続いている。被災された方々同様に、ケア提供者についても精神的なケアニーズが高まっている。

1. 行程ならびに訪問先

- 8:00 ホテルを出発
- 10:20～11:00 熊本市中央区役所
- 11:30～12:30 熊本市内の避難所訪問
- 13:15～13:45 熊本大学医学部保健学科（宇佐美先生研究室）
- 14:30～15:30 グランメッセ熊本
- 18:00 ホテル到着

2. 活動内容

1) 熊本市中央区役所

市営住宅入居申し込みが始まり、庁舎の中は勿論、外も長蛇の列であった。また1階では、避難をしている方達が壁際に荷物をまとめて生活空間を作り避難生活を過ごしておられた。

その隙間をぬって3階に行くと、医療関係（DMAT等）の支援者が集まってミーティングをしており、管轄の避難所の割り当てや状況説明をされていた。医療チームからは、中央区の避難所では、外傷等の身体的な訴えは比較的少ないが、精神的な不安を持っている人が多くなっていることが語られた。

保健師にお話をうかがったが、避難所対応については、17日から4チームの保健師の応援があり、加えて熊本市市民病院が稼働できない状況であることから、そこに勤めている看護師たちがこの本部内でのサポートや避難所訪問に参加している。熊本市内5区の避難所対応を統括するのは、熊本市の健康づくり推進課であることを教えていただいた。担当者に連絡をしていただいたが、現時点では外部支援の調整だけでも大変な状況があると

のことであった（直接にお話をうかがうことはできなかった）。

2) 熊本市内の避難所

政令指定都市間の協定があり、本避難所では、北九州から来られた事務職2名が20日から24時間体制で避難所のマネジメントをされていた。第一陣は本日までで、第二陣は明日以降から（24日）27日まで継続支援をすることになっている。ここには160人の避難者がいるが、昼間は人数が少なく、半分くらいである。高齢者が多く、最初は環境が変わったために、認知症が悪化する高齢者がおられた、現在は落ち着いている。避難所は早く来た人から場所をとられており、本日夕方から災害時要配慮者を考慮して入れ替えをする予定であると話された。トイレ前にあるベンチを利用して寝泊まりする人もおられるが、2階に住む高齢者を優先的に1階におろし、トイレに近い場所にするということが語られた。この避難所の2階は小室が複数あり、プライバシーを確保できるようになっているため、家族単位や近隣関係を考慮することができる。1階にも男女別の更衣室が確保され、使わない時には授乳室やおむつ替えの部屋として活用されていた。ライフラインは比較的早くに回復しており、トイレは消毒薬等も完備され、きれいに使われている。発災当初は車中泊の人がおられ、外にトイレ（和式）が2機自衛隊により設置されたが、現在は使われていないということであった。食事は7時、12時、19時で、動ける高齢者にはできるだけ動いてもらうようにしてエコノミークラス症候群や生活不活発発病の予防に心がけている。風呂はないが、シャワールームがあり自由に使えるようにしている。1日に1回は熊本市の保健師の巡回、あるいは医療チームの派遣があり、問題があれば相談のできる体制がある。また近くに大学があり、学生や教員がボランティアで活動をされている。余震が続いている時は不安が強かったが、今は落ち着いている。避難所内の掃除等については自分たちで当番制をくんで実施されている。

ここでは、24時間体制で避難所の管理をしてくれる人や見守る人たちが側にいて、また健康に関する相談をする体制も整備されていることから、被災者の安心感を保ち、自立に向けた活動が展開されている。

その一方で、24時間寝食を共にしている職員は体育館に寝ており（そこは、天井からの落下物の危険があるということで、本学会の先遣隊第一陣が来た時には使用禁止の場所であった）、二次災害の危険もあり、ケア提供者のストレスマネジメントが必要そうである。

3) 熊本大学医学部保健学科の宇佐美しおり先生研究室

これまでの先遣隊活動で得た情報を提供すると共に、被災地内で支援体制の確立に向けて尽力されている宇佐美先生と、今後の避難所における看護活動を効果的に行うための方策について話し合った。

4) グランメッセ熊本

ここは、先遣隊第一陣の報告のように、16日の地震後、施設内立ち入り禁止が続いている。2200台の駐車スペースに、多くの方が自家用車で避難され車中泊や、テント生活をされている。昼の訪問時には約6割はうまっていたが、駐車スペースに私物を置いて場所取りがなされている場所を合わせると、8割は埋まっている状況であった。こちらにはペット同伴の方が多いということもあり、ペット相談の窓口も開設されていた。ボランティアによる炊き出しや配給があり、大型マイクが取り付けられ、できるだけ情報提供が公平にいきわたるような努力がなされていた。

3. 課題

新幹線がつながり、多くのボランティア等が入り復旧・復興に向けた活動を展開したいが、天候不順により二次災害の危険性があることから、被災地での活動が困難な状況がある。

被災地の中で救援活動を展開しているケア提供者に、自分たちの生活再建を考えることができるように、切れ目のない支援をしていくことが必要である。

ケア提供者は、外部支援の調整に多くの時間を割いている現状がある。その調整については、被災地内の職員をサポートする形で外部から専門家が長期的なスパンで入り活動をしていくことが必要となる。連休を控えて、外部支援者がたくさん入ってくることが予想されているため、その前に本部調整役割をサポートする体制の確立が極めて重要と考える。

4. おわりに

避難所内の物資は潤ってきている一方で、熊本市内のコンビニの陳列棚には何も置いていないスペースが目立ち、品薄になっている。

外部からの支援の手が少しずつ拡大し、個別的になっているが、なかなか全体概要がつかめない状況が継続している感がある。被災地のケア提供者は被災をしながらも懸命なケア活動を展開されている。支援力、受援力、それをつなぐ調整力が問われている。